

小野 あずさ

今、イギリスで噂のパフォーマンス

今月は、皆さんにイギリスのユニークなパフォーマンスをご紹介したいと思います。

演劇とは、観客が客席に座って公演を鑑賞するのが一般的ですが、そのような概念を壊した、観客参加型演劇がここ10年、イギリスで密かにブームになっています。この新しいスタイルのパフォーマンスを通称「プロミナード　パフォーマンス（遊歩道パフォーマンス）、または、サイトスペシフィクパフォーマンス(特定用地パフォーマンス）」と呼びます。このタイプの演出の先駆者は、パンチ・ドランクというロンドン出身のフィジカルシアターグループで、使われなくなった工場、ウェアハウス、フィルムスタジオなど、4～5階建ての古い建物全体を使って、パフォーマンスを展開しています。

観客は皆、入り口で白い仮面を渡され、それを装着してから、建物に入場します。その仮面は、16世紀にイタリア北部で生まれたコメディアデラルテ(仮面を被った即興演劇）を想像させる白い仮面で、見た目は少し不気味です。15分ごとに20人あたりの観客が入場できる仕組みになっていて、入り口で混雑することはありません。入り口もそうですが建物全体がとても薄暗く、廊下は何本にも分かれ、ドアも沢山あり、かつ皆が似たような仮面を被っているため、友達と一緒に行っても、逸れてしまう。それが、このパフォーマンスの狙いと特徴なのですが、観客が自分で観たいものを観る、行きたいところへ行く、とても冒険心を刺激される空間に引き込まれるのです。その中で2～3時間、好奇心に任せて、自力でこの巨大な建物を歩き回り、ありとあらゆる出来事や空間、絡繰り、足跡を間近で観察、目撃し、自らのストーリーを創り上げていくという演出なのです。

私がパンチドランクの公演を初めて観たのは、2005年の『Firebird Ball』という演目でした。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』、そしてストラビンスキーの『火の鳥』が同時展開された公演でした。薄暗い部屋で、古い家具に囲まれ、机や棚に置かれた手紙の山を読みあさってみたり、研究室で実験に取り組む博士（役者）を間近で観察したり、階段をブツブツ何かを唱えながら走り去る牧師（役者)を追いかけてみると、ロミオとジュリエットの寝室にたどり着いたり、その寝室の暖炉を潜り抜けると地下に繋がる秘密の階段があり、湿った地下では林が茂っていて、その茂みの中で誰かのお葬式が行われているといった具合です。

建物そのものの特徴を活かしながら、緻密に作られたセットや小道具で独特な空間を作り上げられ、演劇とダンスが融合されたパフォーマンスでした。その中で、一番感心したのは、それぞれのスペースを全く違う空間、雰囲気に創り上げる手助けをしていた照明でした。舞台の照明と違っていて、見せる照明というよりも、観客をその世界に引き込む照明でした。歩み寄ることで見え方が違ってくる照明だったり、何かの隙間から漏れるわずかな明かり、時間が経過すると消えてしまう照明や、日食のような現象を活かした照明だったり、とても詩的な要素をもっていました。

私はそれ以降、ほぼ毎回彼らが新しい公演を打つたびに鑑賞しに行っています。巨大アートインスタレーションと呼ばれているこれらの新しいスタイルのパフォーマンスは、これからもどんどん進化していくことでしょう。

